

【講演記録/東方齋・荒尾精先生追悼式】

京都若王子神社前に祀られた「東方齋荒尾精先生の碑」をめぐる

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長 藤田 佳久
 (2022年10月30日、荒尾精の追悼式の若王子神社の追悼式にて)

はじめに

ただ今ご紹介いただきました藤田と申します。この会も毎回ずっとお話をさせていただいてきたわけでありますけれども。今回は今日お配りしましたプリントの一番上のタイトルっていうのを後で付けたのです。本当は2番目の話をしようと思っていたのです。123年前に、東京同文書院ができてからの話をさらに深めていったらどうかと。東亜同文書院の先駆けって言いますかね。その始まりということで、そう思ったのですけど。途中で同窓会の副会長である堀田さんのほうから今日の参加者の名簿が届いたのです。かなりの方が新しく来られた方なので、全体の人数制限の中でも新しい方がこれだけおられるのであれば、やはりこの場所の説明も少ししたほうがいいのではないかということで新たに1番目を加えたのです。

I 荒尾精先生の碑

荒尾先生の碑、そして今、角さんのほうからお話ありましたけれども。九烈士の歴史。この辺のところ最初にちょっとお話をさせていただきたいと。1番目の問題です。先ほど追悼式が大きな碑の前でございました。初めてご覧になった方も多いと思うのですけど。高さ5メートルあります。随分たく

さんの文字が刻まれておりますが、1枚めくっていただきますと次のところに碑の原文が書かれている。ちょっと読みにくいですけど、これ以上拡大できなくて。これがA3で精一杯なので。問題はここに書かれている文章等につきまして、1枚目にちょっと戻って下さい。

荒尾先生の碑、文章がありまして。これを読解されたのは金沢にお住まいの東亜同文書院卒業生42期の三田良信さんという方です。この前、金沢で講演会をやりましたけど。もしこの方が生きておられたら是非お願いしようとして最初予定していたのですけど。直前に亡くなられてしまってできなかったのです。この方は書院の卒業生の後、金沢地区で大学の先生やったり、漢文の先生をやったりされて、日本の漢字検定っていうのがありますけど。そのボスをやっておられたのです。だから、ありとあらゆる文字を読めるのです。崩し字を含めて。そういう点で非常にすばらしい方です。この荒尾先生の文字っていうのは、一癖、二癖、三癖ぐらいあって、大抵の人は読めないです。それを三田さんはいとも簡単にきちんと意味を取りながら読んでいく。非常に豊かな経験があったて読まれた。

先ほどもお話ありましたけども、今から10年もうちょっと前、東亜同文書院の卒業

生がたくさん集まって、碑の前で追悼式をやったことがあります。その後、先ほどありました京都での展示会もありました。そこに三田さんも参加されてあの碑を是非読みたいというわけで、息子さんと若干の手伝いの方もみえて、あそこに足場みたいな作りまして上から全員で掃除しました。苔が生えていてもう読めなかったのです。今もまた生えているのですけど。この地区の同窓会の人たちが一生懸命、掃除をしてくださっているのですけど。そこで碑を読まれた。この上のほうからバレンですと取りながら。その結果が今の2枚目の文字です。

これは大きく言いますと、近衛公が荒尾さんの死を残念だっことで悼んで書かれた。しかし、近衛と荒尾の2人は会っていません。残念ながら。歴史の時間帯がちょっとずれたのです。だけど、荒尾のことを近衛はおそらく根津一から聞いたのではないかなと。実は荒尾が台北でペストにかかってしまったのです。今だったら治ると思うのですけど。当時は、かかったことに1週間ぐらいかかってから分かって、その後3日目で亡くなってしまったのです。その時に、側にいた方が荒尾先生のお葬式をやって、骨をちょっと持って帰られたのです。その方が、また漢文の良くてできる方で、個人的に荒尾精先生を悼んだ文章を書いた。その本もあります。私もそれ持っています。それとほぼ同じなのです。だからそれを見た近衛篤磨公が、そこで荒尾精先生を悼むというような碑文を作りたいと思っていた時に、俺の気持ちとぴったりだというわけで、それに少し手を加えて碑文を書いたというふうに思われます。刻むにあたっては、当時の

清国の一流の書家の人をお願いして文字を書いた。だから、これはまさに日中合作の作品でもあります。そういう点で中々そう簡単に読めないのだけれども読めるようにしていただいたと。金沢大会の後、綺麗な碑文になりました。その内容をいちいちお話しすると荒尾さんの人生史になってしまうので、時間がなくて全部をご説明するわけにはいきませんが。少しだけ。

II 荒尾精の生い立ち

ところで荒尾精のお父さんが尾張藩の藩士で、明治維新で失業してしまって、一家挙げて東京へ出て、そこで金物屋をやったけれども、武士の商法で廃業してしまった。一家離散です。この時に彼だけは近くの麴町の警察署の署長が観察していて、あれはできそうな奴だというわけで、自分の書生に引っ張ってきて警察署に勤めさせた。当時の警察署は夜な夜な皆集まってきて色んな会議をやるのだけれども、その中心は対朝鮮政策。日本はオープンにしたのに朝鮮は港を開かない。何故だというようなことで。これは色々な政治的な思惑もあるけれども。西郷隆盛はその先頭に立って最後は朝鮮征伐を主張し、西南戦争で敗れるわけですね。韓国としては、朝鮮としては何故そうせざるを得なかったかって言うと、後ろにある清国の管轄にあった。

そこで彼は朝鮮とその背後にあるこの清という国との国際関係を初めて知ったのです。今までは名古屋だけ。しかも日本だけ。小さな世界がいつぱんに膨らんで、そういう清というのは一体どんな国かって1回見てみたいということをそれ以降ずっと考えるようになったのです。清の国は実際には

列強からずいぶん侵食されていると。そういう侵食されていることは何故かというように関心を持ちます。当時は日本の教育制度も一般的に組織化されていませんので、軍関係の学校に行っても最後は陸軍大学校を出るわけですけど。その過程の中でますます清国の情報を欲しくなって、行きたくなると。そこで当時の師団司令部と何度も交渉をしました。しかし、まだお前は行くな、早すぎるということで、当時は清国の色んな文献とか地図とかを色々勉強するチャンスを与えてもらうのです。そして、やっと清国行けるようになったと。

しかし、いきなり行ったら相手にされません。しかも国籍が分からない人物はすぐ殺されてしまいます。

Ⅲ 岸田吟香と荒尾精

そういう状況の中で誰を頼ったらいいかって時に、岸田吟香という当時の国際的なビジネスマンですね。日本最初のビジネスマン。ありとあらゆることをやった人です。日本で最初の新聞作ったり油田開発をしたり定期船を走らせたりとか、100種以上の仕事をやった人です。渋沢栄一よりはるかに前にやったのですよ。だけど、まだ時期が早かったから大きくそれを盛り上げていくことはできなかったのですけど。とにかく、ありとあらゆる仕事をやった。その息子さんが岸田劉生っていう絵描きさんなのです。娘さんの麗子像っていう、たくさん娘さんの絵を描いていますけど。そこで初めて清国に行くつながりを持った。

岸田吟香は何で国際的ビジネスマンになったのかっていう話をすると長くなってしまうのですけど。この方もよく勉強した方

で、蠟燭の灯りで勉強して目を悪くして、しかも幕府と朝廷との間に意見の相違なんかもあってその間で侍をやめ逃げ回ったりしたことがありました。そういうこともあって目を悪くした時に、横浜のヘボンという宣教師が眼医者だと知り、治療します。それまで眼薬というのは飲み薬か、筆の先をちよっと付けてやるぐらいの薬しかなかった。ヘボンはそれに点眼薬、今の目薬と同じ薬を開発していた。それで1週間で全快したので、彼はヘボンを神様みたい思ったわけです。

その時にヘボンは日本語と英語の辞書を作っていました。その時に武士階層だけの言葉ではなくて吟香は庶民階層の言葉もできる。逃げ回った時にお風呂屋さんの三助までもやった人ですから、言葉も沢山知っているっていうわけで、彼はヘボンに採用になって辞書づくりを進める中で、カタカナ、ひらがなの活字がない。日本では無理だ。そこで上海へ行った。イギリス租界の中にイギリス系の印刷屋が2軒。そこでひらがなとかカタカナ文字を彼が全部作って、彼が『和英語林集成』って命名するなどして辞書づくりを手伝ったわけです。後にヘボンは本国にこの辞書ができましたよっていう報告を送ります。しかし、その中に彼の名前は書いてくれてなかったのですね。当時の宣教師と日本人の関係はそんなところだったのだろうと思うのですけど。

上海に行った岸田吟香は元々、絵も文字も漢文もできる人だから、たちまち多くのファンを作っちゃった。のちに再度上海へ来て目薬も売った。爆発的に売れた。日本でも銀座を拠点に売りますけど。岸田吟香がやがて次々とチャンスを掴もうと商売を始

めた。そこへ荒尾精が訪ねて是非ご指導をお願いしたいと。しかし、岸田吟香は幕末の苦い経緯があったから、藩閥政治と軍隊は大嫌いだったのです。だから中々受け付けてくれなかったのですけど。ある時、ここから先は戯曲の話。史実と戯曲とどの程度一緒かちょっと分かりませんが。ある時、自分のピストルを持って行って吟香の隣にある花びんを打ち抜いて、このぐらい決意がありますと。話ではそれで吟香はオーケーしたということになっています。そこで、上海は列強の支配地だから本当の中国は見えないから武漢へ行くと勧められ、そこで日本から来た若者も組み入れて清国情報を収集したのです。

そういう経過の中で荒尾精は清国がこんなに貧しいのは経済がほとんどできてないからだ。日本と清国が貿易関係を結ぶならば、ウィンウィンの関係で列強にも対抗できる。列強は日本も狙っているわけですので、列強に対して日本も強くなるということで貿易実務をやる人が必要だということで日清貿易研究所を作ります。こうして武漢でも日本から流れてきた若者たちを集めて私塾みたいなことやっていました。そのような経験をふまえ、正式にきちんとそういう貿易学校を作り、そうしてさらにそれを深めていく必要性を感じた訳です。それがやがては東亜同文書院の道にいくわけです。ダイレクトにいったわけではありません。まだいくつかありますけど。そういうことで荒尾精が清国をそういう目で見ている。商取引をお互いにやりウィンウィンの関係でやるためにはどういう情報があるか。こうして日本人に初めての清国の生情報を伝え、『清国通商綜覧』を根津にサポートさ

れて出版し、これが明治の時にベストセラーになるのです。そういうデータをベースにして荒尾精が日清貿易研究所をつくるなど、色々頑張ってきたわけです。

日清戦争が起こった時、荒尾精は日本が勝って領土を取る、さらに賠償金を取るという大きな流れに対して、取るな。と反対します。何故かと言うと、賠償金を取ったら、それは清国政府が払うわけじゃなくて庶民から巻き上げる。そうすると貿易をやろうと思っても金ができないじゃないか。貿易ができなくなるということで猛反対をした。その時に、それをここの家で書いたのです。このテントの向こう側です。竹細工の囲いの家があつて根津さんの家だったのです。そこで書いた。後でご覧になって下さい。今、他の人が入っていますから覗いたら駄目。入口に碑が立っています。それをちょっとご覧になって。それで、この碑がここに建ったという経緯をみると、元々は根津の土地です。根津も荒尾が使う時は荒尾に任せて、九死に一生を味わった戦場経験もした日清戦争が終わった後は、本当に4年間ここでずっと隠遁生活をした。しかも、禅の修業に行っている。次々と日清貿易研究所の優れた教え子たちが戦死したという情報が入って来る中で、「九烈士の墓」というのをすぐそこに建てたのです。その九烈士の墓と高さ5メートルの荒尾への碑は根津家の土地です。

IV 碑文と土地の行方

その後、根津が亡くなって東亜同文書院の卒業生の会に託した。しかし、その後、その会である滬友会の皆さんがお年を召して解散をしたため、その土地を一括、霞山会に

渡した。霞山会の人たちが3年前に。京都をずっと巡った時に、ここをご覧になって、愛大の関西、西日本の支部の人たちが中心になって一生懸命、世話をしているというのを知って、これを全部、愛知大学へ譲渡したいというような話が出されたのです。その後の経過はちょっと闇の中です。本当は上手く実現すると良いと思います。この碑とか関係地をきちんと管理して活かしていくことができるからですね。是非、平成の卒業生の人たちも上手く継承していただいたら良いと思います。

ところで、荒尾は先を見ることに非常に才があった。どんな問題も彼は先読みができる。事態はその通りに動いていく。近衛と荒尾精の一番の最大の共感点です。だから、そういう点でこの碑文の最後にも本当に荒尾の死は残念だということ、近衛は悔いている。世の中の先が見える荒尾精は貿易で日清間のお互いに良いのではないかっていう先を読んだのです。実際、戦後はそういうかたちになっています。

このことに関してさっきのような話もあったのですが。その前にその5メートルの碑の下に霞山会が簡単な説明文を書いて提示しています。あれは非常に簡単で一般の人が読むには簡潔すぎる。しかも金属板が腐りかけていた。それを知った同窓会副会長の堀田さん(香川)があれば非常に見苦しいから、あそこを綺麗にしましょうっていうわけで、あの説明盤を寄付したのです。その時について私のところに来て、あの説明盤だけでは分からないから補足的に解説をしてほしいという依頼もありました。九烈士の方もそうしたいと。荒尾と根津が亡くなった教え子たちを悼んであんな大き

な文字の碑を書いたのです。本当に力強い文字力です。

その時の私のほうでは、せっかくここでやるのだったら愛知大学の存在感のある情報も伝えたいというわけで、レジュメのこのところに碑の説明版用って書いてある文をつくったのです。右側のほうの下ところに愛知大学の現状のことにしても説明しています。左のほうは九烈士のところへ説明版として書いたらどうかっていう文です。九烈士の碑の横の通りをずっと奥へ行きますと新島襄のお墓があって、同志社の新入生の人たちが毎年ここを通ってお参りをする。したがって九烈士の墓の碑があれば、何人かは読むであろうと。荒尾精の実際の教えを受けて同志社を卒業した後、網走に行った卒業生がいます。行く時にご挨拶に訪ねて、荒尾精は彼に「石鱈」という文字を送った。どういうことかって言うと、「石鱈」というのは自分の身を削って相手を綺麗にする。その精神でやりなさいよ。これは書院の人たちにも根津にも伝わっているわけです。社会人になって、ビジネスを進める時あら儲けをすとかではなく、こういう倫理観でもって事業をやらなくちゃいけないと。そういう教えをずっとやる。その原型です。そういうようなことがあって、彼は後に同志社の総長として戻って来るわけです。ここで総長さんになったわけですから凄いことです。こうして、同志社との関係もありますよっていうことを同志社の学生諸君の読む人に伝えたいと思ったわけです。ついでに言いますと、根津は結婚されます。荒尾が亡くなる2か月前に。その相手の奥さんは先ほどちょっと話がありましたけど。同志社、当時は大学ではなかったけど。今で言

うと女子大になります。さっきのお話でもっと色んな人脈があるのではないかって、角さんのお話がありましたけども。角さんは非常に探求的な人ですから、研究されていくのではないかなというふうに思います。

このところは今日、時間がないので最後に九烈士の人たちの名前をちょっと挙げさしてもらいました。そういうような歴史的な事実の中で東亜同文書院、荒尾精も大きな足跡を残したのだということ。

V 荒尾の金沢講演会

次は珍しくカラープリントです。これは見たことあるって思われる方もいるでしょう。この前、金沢講演の時に使ったレジュメのうちの1枚です。それにちょっと色々書き足してあります。金沢っていうのは東亜同文書院と非常に密接な関係があります。その話はレジュメの最初の赤い囲みの中に書いてあります。荒尾精がいよいよ貿易研究所を上海で開設する時も、日本のこれからいく方向は貿易を掲げた。その学校に多くの若者が来てくれるようにと演説会を各地で開催しました。そのうちの1つが金沢で。その時に参加した一番上の人物が地元の実業家、野村喜一郎。近江市場の魚屋さんです。この方が事業家になって貿易商になっていく。それから、次が納富介次郎で、彼は幕末に江戸幕府がひらく時にあたって上海へ若者30人ぐらい送り込んだのです。彼はその内の1人、佐賀藩の人です。その人が帰国してから工芸学校の校長さんをやって、石川県には焼き物が色々ありますが、そういうものを輸出できるのではないか。なお、この方は全国の工芸学校の校長さんになって、日本の新たな工芸の技術って

うのを開発していった人なのです。

それからもう一方、一番下に北方心泉。心泉さんっていう人。北陸は真宗が強いのです。清国行って早く布教活動をしていました。それで南京にもうお寺を作っていたのです。そこで近衛篤磨は、そこに行ってあの建物を使わせてもらえないかって頼んだのですが、できたばかりで駄目だと。その代わりに他のお寺でどうかっていうことで話はずいたのですけど。この北方心泉っていう人は、当時の清国の揚子江中流部分の流域を治めている総督の劉坤一ですけど。その方と懇意になっています。この方は単なるお坊さんではないのです。非常にフレンドリーな人で、その地域のトップリーダーの劉坤一と仲が良かったのです。やがて2回目の世界旅行をして日本に戻って来る時、途中清国へ寄ったのが近衛篤磨公ですね。この人はドイツでも学位を取った人です。貴族で学位を取った。ドイツ語で。これは凄いですね。2回目に帰って来る途中で清国に寄って、この劉坤一に清国がこんなに伸び悩んでいる、列強にやられているのは、教育レベルが低いからだと。だから是非、日本と一緒に学校作りましょうと。その時はちょうど日清戦争で日本が勝ったその直後、中国の人たちは、俺たちよりはるかに下だと思っていた日本が勝っちゃった。これは大きな改革をしたせいであると。俺たちも頑張ろう。子どもたちは日本へ送らなくちゃいけない。一緒に学ばせる一歩だと。これが東亜同文書院の発想の原点になるのです。

VI 南京同文書院

そこで南京に同文書院っていうのを開設

することになり、前述のようにそのお願いに近衛篤磨が行ったわけです。全く面識がなかったのだけど、それを繋いだのは、この心泉。宗教家の人です。だから、すぐそういう同意をしてくれた。近衛さんは上流のほうの漢口。そこへ行って張之洞っていう人とも会っている。これも長江流域のリーダーです。その人と話したらそれもオーケーです。すぐ自分の孫を日本へ送りたいと。中国の人は決意が早いですね。すぐお孫さんを東京へ送ってきた。近衛さんはすぐ引き受けたのだけど、学校をまだ作ってないから学習院に入れたのです。来る人たちのためにも施設があるなってことですけど。

そういうわけで日本人と中国人と一緒に作った学校を作った。南京同文書院です。これが東亜同文書院の基です。その南京同文書院で、いよいよ授業を始めて半年経った時に、山東省で発生した義和団の乱。これは外国勢力を追放する運動です。これが大きな反乱となって全国に広めていきます。その一派が南京に攻めてくるっていう情報があって、南京同文書院はせっかく半年経ったのに動揺します。ここは危険だっていうわけで上海に移った時に荒尾精がそこでビジネススクールやろうという大きなプランと合体をして東亜同文書院というかたちでスタートするわけです。そういうわけで、南京同文書院っていうのはその原点にある。しかし、義和団の乱で上手くはいかなかった。

VII 東京同文書院と留学生たち

しかし、中国の人たちはあきらめずに日本へダイレクトに留学生として来日し、それを受け止めたのが近衛さんです。「東京同

文書院」っていうのを、東亜同文書院ができる2年前に作ったわけです。経営母体の東亜同文会も設立しました。表紙の一番下の所にちょっと説明遅れました。東亜同文会、誕生っていうのは、11月の2日。ちょうど3日後ですね。今日10月30日。これまで毎年ここで追悼式をやってきたのですが。開催日の都合はいつも週末2日になり、時間がずれていました。しかし、今年はドンピシャ。荒尾さんが亡くなった10月30日が今日。2日後に東亜会と同文会っていうのが併合して東亜同文書院ができた。参考までに言いますと、間の日であるこの11月の1日、私の誕生日です。そういうこと（笑）。オール1の日です。最低の成績の日（笑）。

このところ説明したいのですが、その後の流れは書いてあって、最後に愛知大学まで辿り着けるわけです。このストーリーはやっぱり非常にドラマチックで、非常に複雑な糸を当時の東アジア情勢、世界情勢が解きほぐしていくっていうのは、これはなかなか興味深いですよ。そういう経過の中で東亜同文書院は1901年、ちょうどプリントの真ん中ぐらい。それで学校の誕生日を、右のほうの青線のところに引いてあります。

その中で、その先にきちんとした学校に誕生していくのが東京同文書院。これは近衛篤磨公による設立です。そしてどんどん留学生が増えてくる。日清戦争で日本が勝った。その後、日露戦争にも勝っちゃった。さらに中国から大挙して留学生が入ってくる。だから東京同文書院の後、それを見た日大とか法政とか明治とか、そういうところも皆、速成課。すぐ日本語が勉強できるような速成課をつくります。嘉納治五郎ってい

う柔道家がおりますが、この人も教えることは大好きな人です。自分の学校を作って多く受け入れました。そういうふうには、ブームになって、とりわけ東京の神田神保町辺りは一番多い時は1万人ぐらい中国の留学生が集まったということが言われております。そういうことで日本にどんどん清国學生が来る。このプリントの青いところに①と書いてあります。これは、本日、新しい方がこんなにたくさん来られるっていうことを知る前に準備していた資料です。次のところでは、東京同文書院もやろうと。それについて南京同文書院、その次に中華學生部というのができます。この1、2、3を今回の発表でやろうと思ったのですけど。先ほどのようなことで全部説明まではいけません。

ちょうどそういう研究をやっている最中に古本屋さんからの情報が入って、東京同文書院の中国人の卒業生名簿がありました。買いますかと。16万円。東京同文書院を建設する建設日記というのが、これが6万円です。ちょっと足元を見られた。だけどせつかくです。購入して今回早速その分析をしたのです。私は専門が地理学なので地図を作るのが好きでそこから動きをみたのです。1から12は東京同文書院生の卒業生年次別。しかも中国の出身地別。しかも、どんな役職を持っていたのか。お役人とか。かなり高い地位の人でも東京同文書院に来ているのです。この最後のところ(図1)を見ますと、この方は第1期の卒業生で、その後、駐日大使に。そしてその後、21か条約の件の当事者になったのでなんと売国奴なんて言われたのです。中国で。そのため、辞任せざるを得なかったのですけど。こ

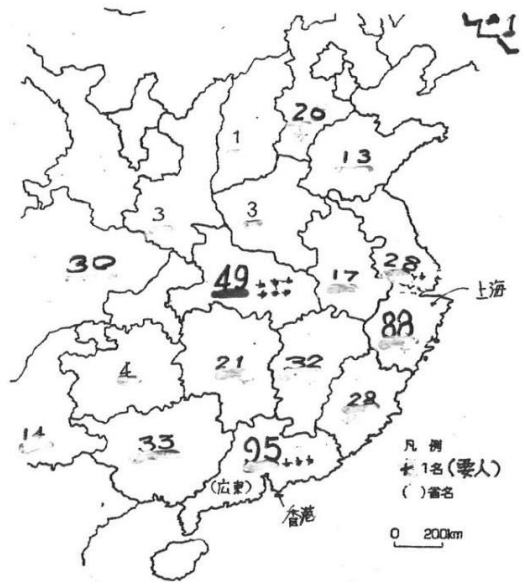


図1. 東亜同文書院の明治期卒業生の省別合計(～明治45年)

ういう大物が結構来日しているのです。

東亜同文書院の卒業生の旅行レポートをずっと見ていると、あちこちで知事さんとか色んなトップの人だとか軍閥の人に会っています。そのほとんどの人は日本への留学生です。戦後の中国ではあんまりそれを表に出せないです。だけど、書院の人たちの記録にはみんな全部書いてある。そういうかたちでお互いに巻き込んだのです。しかも、日本へ留学した時の中国の人っていうのはパブリックの精神っていうのはあまりないです。荒尾精みたいに自分を削って相手を磨くってことはない。だから、道路があると両側から削って道路をどんどん狭くする。戦前の中国は本当に汚かったです。

そんな中で日本へ来た留学生の人たちは日本の知恵を学び、持ち帰ります。そこで道路を広くする。バスを通したり、図書館を作ったり色んな公共施設を作った人が多い。そういう記録が残っている。戦前の日本で

影響を受けた人たちが中国近代化のベースを作った。こういうようなところはもっと高く評価しても良いのではないかな。東京同文書院の1つの成果というふうにみることもできるのではじゃないかなと思います。

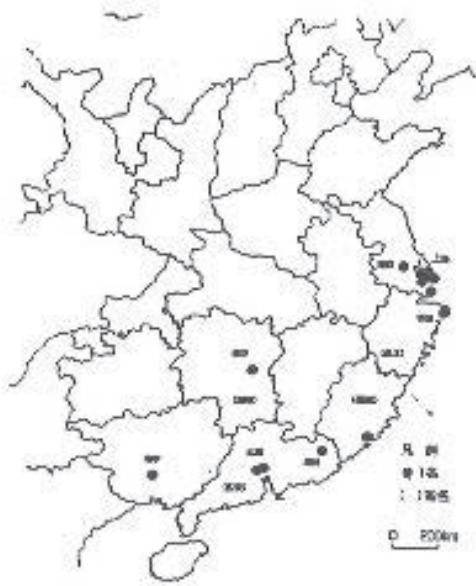
さっきの図1を見ていただきますと、留学生は全国各地から集まってきていますが、やっぱり沿岸部が多い。それぞれの地図の中でペケ印がちょっと書いてあるのは当時のお役人というか、トップクラスの人たちが来ているのを示しています。日本へ留学に来るのは、やっぱり日清戦争、日露戦争に勝った日本というのは一体どんな国だろうと、興味はもの凄くあったと思います。そういう人たちが入ってきたのですが、先ほどの名簿は残念ながら後ろまで全部書いてないのです。真ん中から真っ白になっている。しまったと思いましたけど。その後も他のデータの補充をしますと、ここの真ん中の右側、数字が書いてある図です。各省から何人来たか。こういうことも分かってきます。要するに肩書きのある人です。そういう人がどのくらい来ているのかっていうことは分かります。そういう点でいうと、やっぱり全国に関心がありますが、沿岸部が多いです。都市部が多いからでしょう。全国の人たちが日本に憧れた。そういうことが分かる。

この写真は、東京同文書院の人たちがその年に一斉に集まって皆で撮った写真です。近衛公のほうでは目白のところへ最終的に進出してきます。この一番右、見て下さい。戦前の東京。地図をコピーしたものです。そこに同文書院っていう文字があります。上のほうに、ちょっと赤線引いておきました。その下見て下さい。「近衛邸」と書いてある。貴族ですからお金持ちだったので、広い土

地を持っている。これは戦前この辺を「近衛町」と言いました。戦後はもう全部変わってしまいましたけど。

もう1つ細かいことを言うと、ここに柏原文太郎っていう人がいますけど。この人はほとんどそれを近衛さんから引き継いで全部面倒を見た。この方は多くの中国から来た人。それからベトナム人は独立できるのではないかって。日本がロシアに勝ったから。だから独立運動派でいっぱい来る若者を受け入れたのです。そうするとまず警戒したのはフランス政府。このままいったらやばいというわけで、日本は朝鮮を支配してもいいから、我々がベトナムを支配する。認めろと。そういう秘密交渉が色々あったわけです。そのようなことで、ベトナム側では特にその中でリーダーだったのがホンボイチャウ。この方が一生懸命、独立運動するために東京同文書院に若者を入れてきて、日本を学べと。しかし、フランスがそういうことで日本政府に圧力をかけてきたからフランスと日本の間にちょっと緊張感が走って、結局日本は、当時は日清日露の両戦争に勝ったから西側的な発想でベトナム人を圧迫することになったのです。ベトナムへ帰れと。そこで多くのベトナム人の人たちはベトナムの名前でなくて、清の名前、中国の名前に変えて対応したけれども駄目。結局は一部の人を残して皆ベトナムへ船で帰されてしまったのです。帰った途端に本人だけじゃなくて、家族も皆、牢獄へ入れられてしまった。あるいは殺されてしまった。それでベトナムは、これが第1回の独立戦争だったと言っているのです。

ベトナムは今、非常に近代化を進めて発展していますけど。今から5、6年前かな。



東亜同文書院中華学生部特設予科第2学年学生の出身学校地の分布 (1931年)



国立中央大学商学院転入学生の出身地別分布 (1931年)

図2. 中華学生部関係出身地分布 (藤田原図) (東亜同文書院、上海)

その独立を祝う式典に柏原文太郎やお医者さんでお金をたくさん出した浅羽氏とか、そういう人たちを表彰して、一部関係者をベトナムの式典に招いたわけです。そういう点で、ベトナムの独立に東京同文書院というのは非常に関与している。そういう認識の仕方をしている。記念センターのほうに、テレビのクルーが取材に来られたことがあります。色々見せたけれども、うちのスタッフの1人が、書類を持っている白い手袋が映っていただけで、ちょっと残念な結果でしたが。色々な資料を撮っていった。そういうようなことがありました。

Ⅷ 中華学生部 (上海東亜同文書院)

その左下は10枚あります。本当は今日もう一本この地図の解説をやりようと思って予定を立てたのですが、途中で本日の参加者の多くが初めてだという情報が来たものだ

から2つ目は時間不足となり終わってしまいました。ごく簡単にこの図2を説明しますと、これは中華学生部といって、書院に併設された中国人学生用の学校で、2年目から日本人学生と一緒に学ぶコースです。これも日中間の色々な歴史の波の中で中国人学生が入ったり、減ったりで、東京同文書院もそうでした。とくに21か条問題のために中国の人たちが一斉に帰ってしまった。結局は1922年に終わってしまいます。その後すぐ引き継いで、中国学生にこの中華学生部を東亜同文書院が開設します。その時の入学生をみると、これは華中からかなり来たが、華北はほとんどいないです。この辺になると中国の経済が南のほうに重心を置いているってということが伺えるわけです。ちょうど、お昼ご飯。またこの続きは。改めて。